



ジェフ千葉U-18では高校3年次にキャプテンを務めた。「選手に一匹切りつけた後も、指導者たてたけなく審判員という道があるということを知つてもらいたい」と菊池さんは話す。



菊池 3級や2級審判員になりたてのときは技術が足りず、副審であればどのような動きでオフサイドラインを見極め、視野を確保するかという基礎を学びました。レフエリーアカデミーで学んだのはマネジメントです。特に試合をコントロールする上で、どう選手に注意すればいいか、笛の吹き方、選手に近寄るか近寄らないか、あえてスルーするかなど、審判員でしか学び得ないような要素を深く知ることができました。

——驚きや発見もあつたのでは。
菊池 選手時代は、審判員がチームマークを注意していて、「なんか怒られているな」としかいませんでした。でも、それもマネジメントの一つだったわけですし、審判員は深く考えた上で選手に話しかけたり、笛に強弱をつけたりしているんだというところが発

——審判員のどんなところが楽し

だつた頃はボーラルと相手と味方だけの世界だつたけれど、審判員になると世界が一気に広がつたというか。選手はもちろん、指導者や試合の雰囲気も考えてコント

ロールしなければならない部分は責任があつて大変ですが、それが審判員の魅力でもあると感じています。

選手と審判員はサッカーファミリー

——選手として一定のレベルでプレーしていたからこそ分かることは何でしょうか。

菊池 まず、選手の気持ちが分かれます。戦術的な部分では、プレーヤーの予想がしやすいというか感覚的にポジションを取ることができるんです。この辺にボールが来そุดとか、「ここにパスが通つたらチャンスになるから自分もスピードを上げようとか、細かい部分の予測がしやすいので、そこはアドバン

テージかなと思います。

——ご自身の審判員としての長所を考えたことはありますか。

菊池 実は昨年、1級審判員の試験に受かることができませんでした。その要因の一つとして、選手や観客にどう思われているか、審判者にはどう思われているかと人目のばかりを気にしてしまい、尻込みしていたことが考えられます。細かいファウルを取り過ぎ

見でした。選手

——ですか。

菊池 自分の笛やコミュニケーションで選手が落ち着き、選手が納得しながらプレーして、試合がスムーズに進んでいるときは樂しいです。試合をうまくマネジメントできているときは大抵楽しいのですが、難しいと思う部分もやはりマネジメントなんです。自分が良かれと思って選手に接しても、選手に「そんなやり取りは求めてない」と思われるときがあります。一方、相手に軽く足を引っ掛けられたことを大きなストレスに感じている選手がいて、審判員がそれに気づかずになると、そこから試合が荒れることもあります。ですから、審判員は常にあらゆることに気を配らないとなりません。選手の気持ちをくみ取りながら必要なコミュニケーションを図り、試合をコントロールするというのが難しい。その難しさを常々感じています。

——最後に、目

標としている審判員像を教えてください。

菊池 日本サッカーの審判界全体として、長所を發揮できる審判員を育てようという流れになつていて、それを克服する



レフェリーアカデミープログラムを受講していた頃の菊池さん（前列右から2番目）
「このときの同期は今も貴重な審判仲間」たとい

て、自分らしさを發揮できず、試合をうまくマネジメントできないことがあつたので、この1年は変に考え過ぎないようその日の試合に必ず選手とコミュニケーションを取るなど、丁寧に対応するところだと思います。きちんと選手に接することによって、選手も公平性を保つていて感じると思いますし、それが安心感につながるはずです。

——最後に、目標としている審判員像を教えてください。

菊池 実は昨年、1級審判員の試験に受かることができませんでした。その要因の一つとして、選手や観客にどう思われているか、審判者にはどう思われているかと人目のばかりを気にしてしまい、尻込みしていたことが考えられます。細かいファウルを取り過ぎ

からこそ、この試合を担当しても「いい」と思ってもらえるような要素が必要なのかな、と。自分の長所は先ほど触れた通り、丁寧にコミュニケーションを取つて選手に寄り添うところです。これから先も「選手に近い審判員」を目指します。選手と審判員は立場が異なりますが、同じサッカーファミリーです。垣根を越えた立場で試合をさばいていけるような審判員になりたいと思っています。